

南方(国体開発)遺跡現地説明会資料

1993.06.05
岡山市教育委員会

1. はじめに

発掘調査をしている場所は、JR岡山駅に程近く、済生会病院交差点の北東に位置する広大な土地です。付近は弥生時代中ごろ他のムラ跡として古くから著名で、これまでも新幹線側道や国立病院などの整備に伴い、発掘調査が行われてきました。近年、この用地でも民間のマンション等の建設計画が持ち上がり、事前の発掘調査の手續きが必要となりました。岡山市教育委員会では、地元町内や開発主体者を初めとする、多くの方々の御協力を得て、昨年九月から、1期計画分9600m²を対象に、調査を実施してきました。発掘区の内南半分について、この度、調査の大詰めを迎えましたので、ご案内する次第です。



第1図 調査位置と現状の条理地割

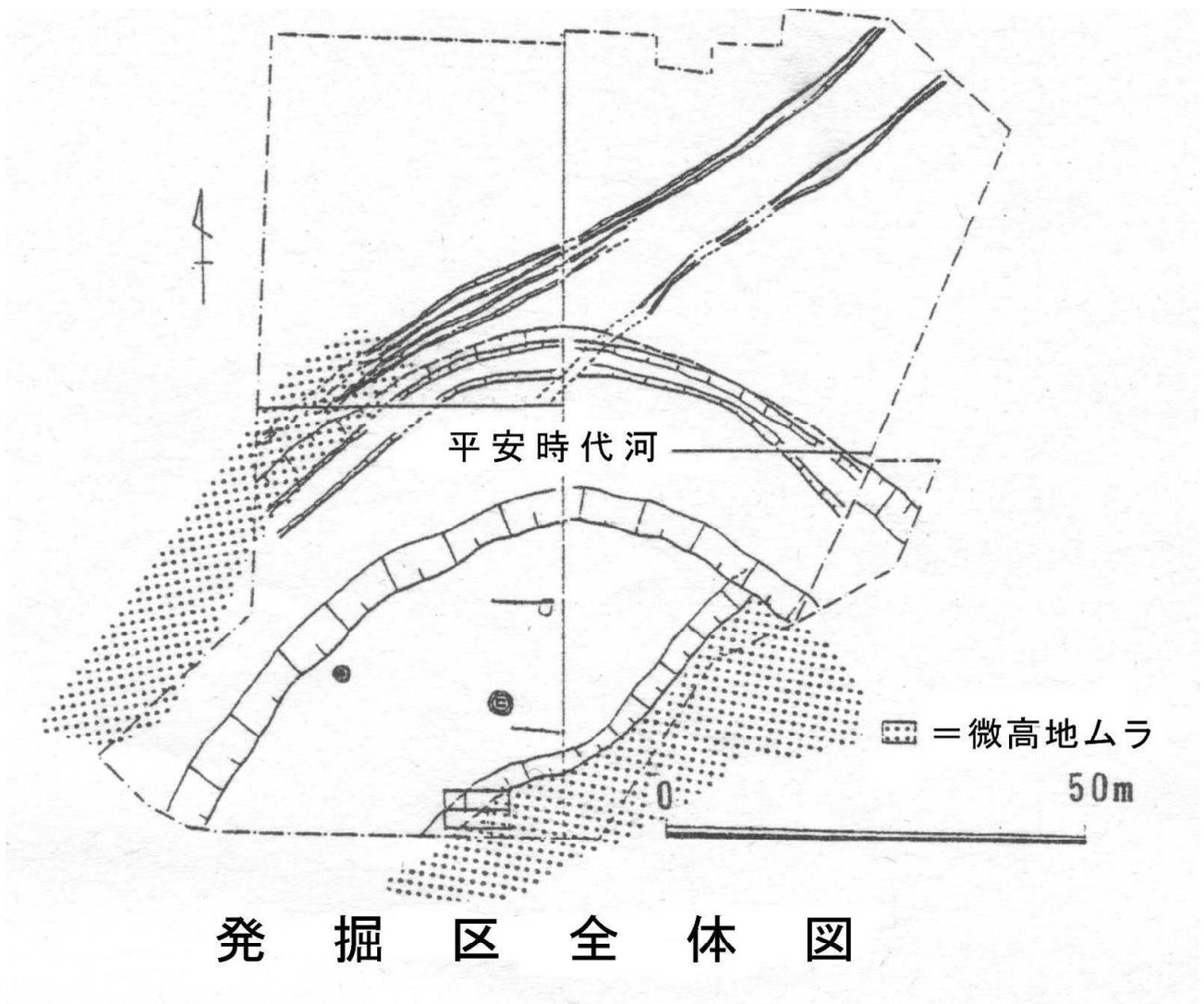
2. 遺跡のあらまし

縄文時代の土器もごく僅か出土していますが、人々の痕跡がまとまりを持つてくるのは、稲作が始まった弥生時代からです。発掘区の南東と北西縁付近は、流されてきた土砂が溜って周囲より高くなって乾き(微高地)、ここに弥生時代以降、引き続きムラが営まれていました。調査の進行している南東のムラ跡は、JRの線路を越えて東に広がっていたらしく、一帯でもっとも大きく中心的なムラと考

えられます。ムラの北西端を僅かに発掘している格好ですが、生活の痕跡を示す穴や遺物が高い密度で、確認されます。弥生時代の内でも前期の末から中期中葉(今から2100~2000年前)頃までのものが目立ち、このムラの最も栄えた時期の一点が窺えます。西北の微高地は未詳ですが、貝殻を埋めた穴などが、見つかり始めました。南東と北西の微高地の間には、河が流れていましたが、発掘区南半分の内では、弥生時代の河は後の時代の河と重複しています。こうした河は、当時の旭川が幾つにも枝別れした内の一本です。

南東の微高地では、続く古墳時代の初め頃の遺構や全般を通じての遺物、さらに奈良・平安時代の遺物も見つかっていますが、中枢部はもっと南にありそうです。これは、微高地間を抜ける河の水量が多かった事とともに、無関係ではないでしょう。平安時代の初め頃、水量は最大で、以後は次第に埋まり、流れを変えていきます。河の底では、護岸用の杭列がそのまま残っているほか、各段階の河を埋める土砂の中からは、平安時代とそれ以前の遺物が膨大量出土しています。遺物の内容は、奈良・平安時代に南東に広がっていたのが、単なる農村集落ではなく、何らかの形で役所に関わるものを含む可能性を窺わせます。

平安時代の終り頃、河が埋まった所には、南から再びムラが拡大し、以後鎌倉時代にかけて、立派な井戸などが認められます。この段階でも、依然河は流れており、調査区全体がベター面に水田化されるのは、近世に入ってからです。



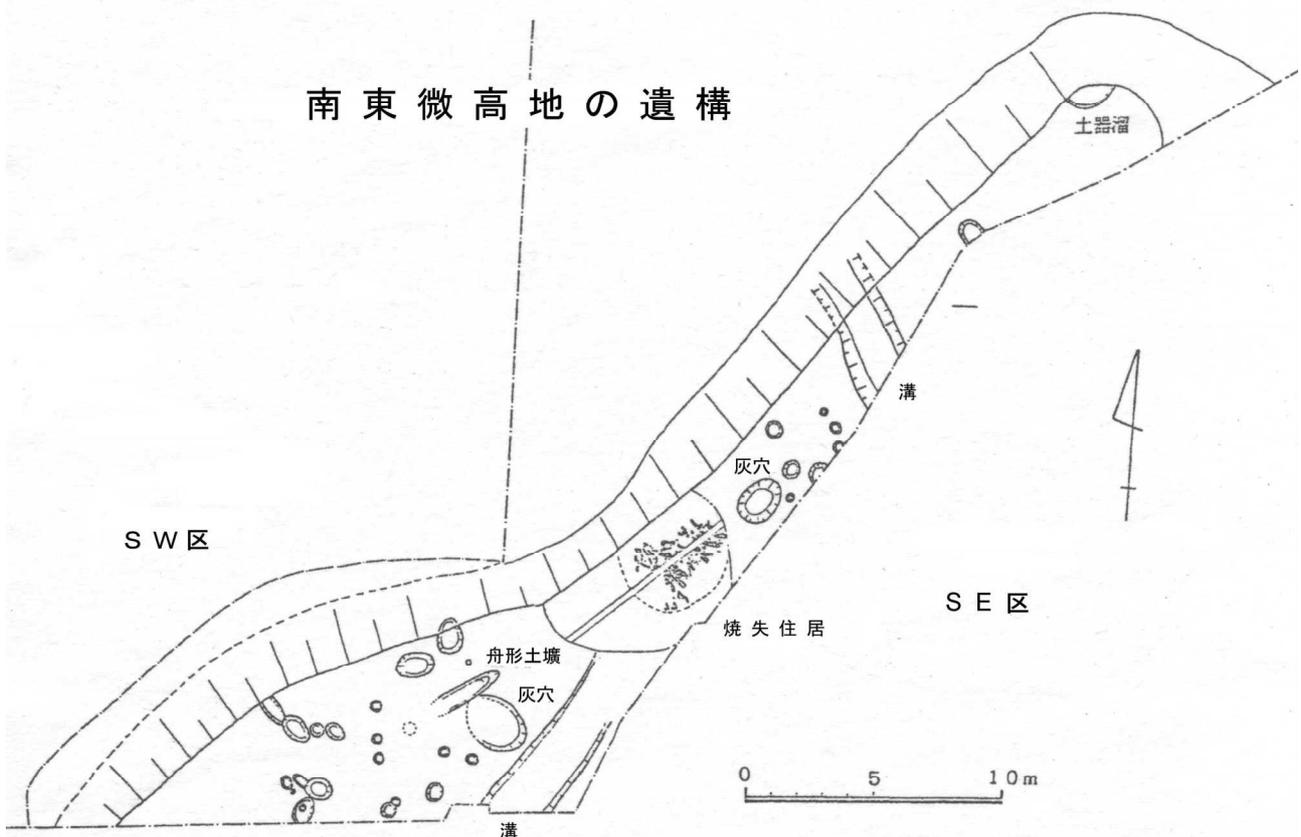
第2図 発掘区全体図

3. 弥生時代のムラ跡[南東微高地](2200～1700年前)

本来のムラの北・西端は後の河道で大きく削り込まれているため、いきなりムラの中心部にあたり、住居跡、柱穴、溝、それに大小の穴が、多数見つかりました。新しいものから順に発掘していきますので、結果的に足の踏み場もなくなっていきますが、当時は、総てが同時に開いていた訳ではありません。

竪穴式住居は、火災にあったらしく、建材が炭になって残っています。穴は意味不明のものが多いのですが、直径1m内外で夥しい灰・炭・焼土で埋まった灰穴と称したものが注目されます。灰穴の土を、水で洗いフルイにかけたところ、あるものは炭になった米と籾殻が集中的に見つかり、脱穀ないしはスクモの利用に関わるものの可能性が考えられます。また、あるものは貝殻や魚の骨が見つかり、食べかすを、灰と一緒に捨てた事が分かりました。さらに、穴の形や大きさからして、本来は食物の貯蔵用に掘られたものを含む可能性も考えられます。この他、多量の土器を捨てた浅い溝などもありました。

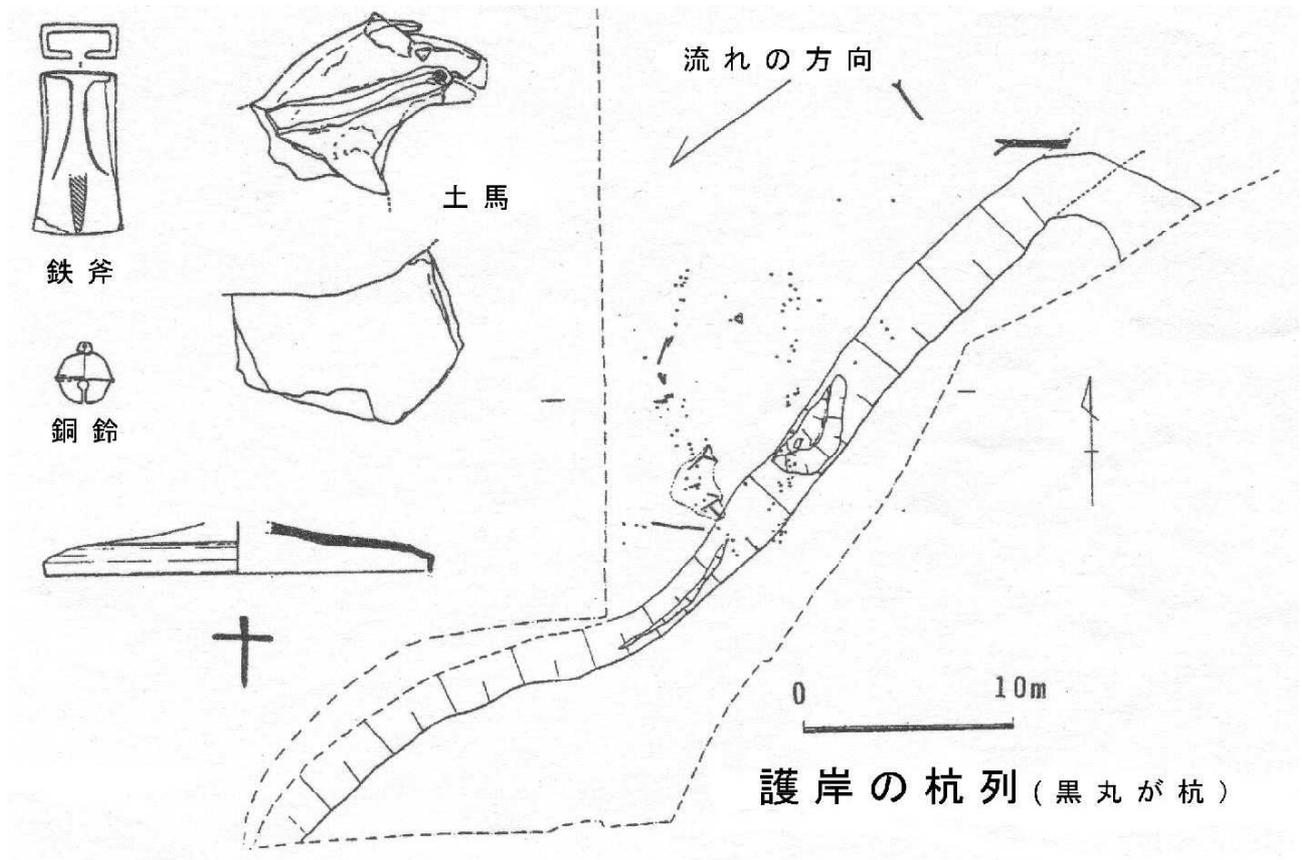
微高地の上と後世の河底からは壺・甕・高坏など移しい土器が出土します。また、稲の穂積具である石包丁、斧、槍、ヤジリなどの石器も各種あります。製作途上品や石クズも多数出土し、このムラで盛んに石器を作っていた事が分かります。他に、糸撚り用の重りや、祀り用の分銅形の飾り土板などもあります。



第3図 南東微高地の遺構

4. 奈良時代から平安時代前葉(9世紀、1200年前)までの河道

川幅は約50m、深さ2.5m余りに達し、弥生時代以降で最も、水量が多く、流れも速かった時とみられます。北東から南西方向という最も自然な方向にストレートに抜けています。このため、南東の微高地を大きく侵食し、かつての弥生時代の住居跡を半分削る有様です。これは、当時の人々にも一大事であったに違いなく、岸付近の水流を弱め、逆に土砂が溜る様、岸から上流沖に向かって杭列(2列以上)を施し、しがらみを形成しています。自然の克服に対する知恵と果敢な努力が偲ばれます。杭列のすぐ北東は水流の関係からか岸が抉れ、付近で土馬・銅鈴、鉄斧が出土しました。これらは、当時の都や地方の役所に臨む水辺で行われた祭祀の道具立てに共通するもので、ここでも同様の祀が行われたようです。河を埋めるのは、粗い砂で、以後急速に埋まっていった様です。



第4図 護岸の杭列と出土遺物

律令的祭祀

奈良・平安時代に、土馬・人面土器・模型カマド、木製の人形・鳥形・刀形、斎串、鏡・鈴などと言った独特の道具立てを用い、都や地方官衙の主に水辺(の道)で行われたもので、祓の儀式に関わるとも、言われる。また、土馬は疫病神の乗り物とも、雨乞の生贄の代わりとも言う。

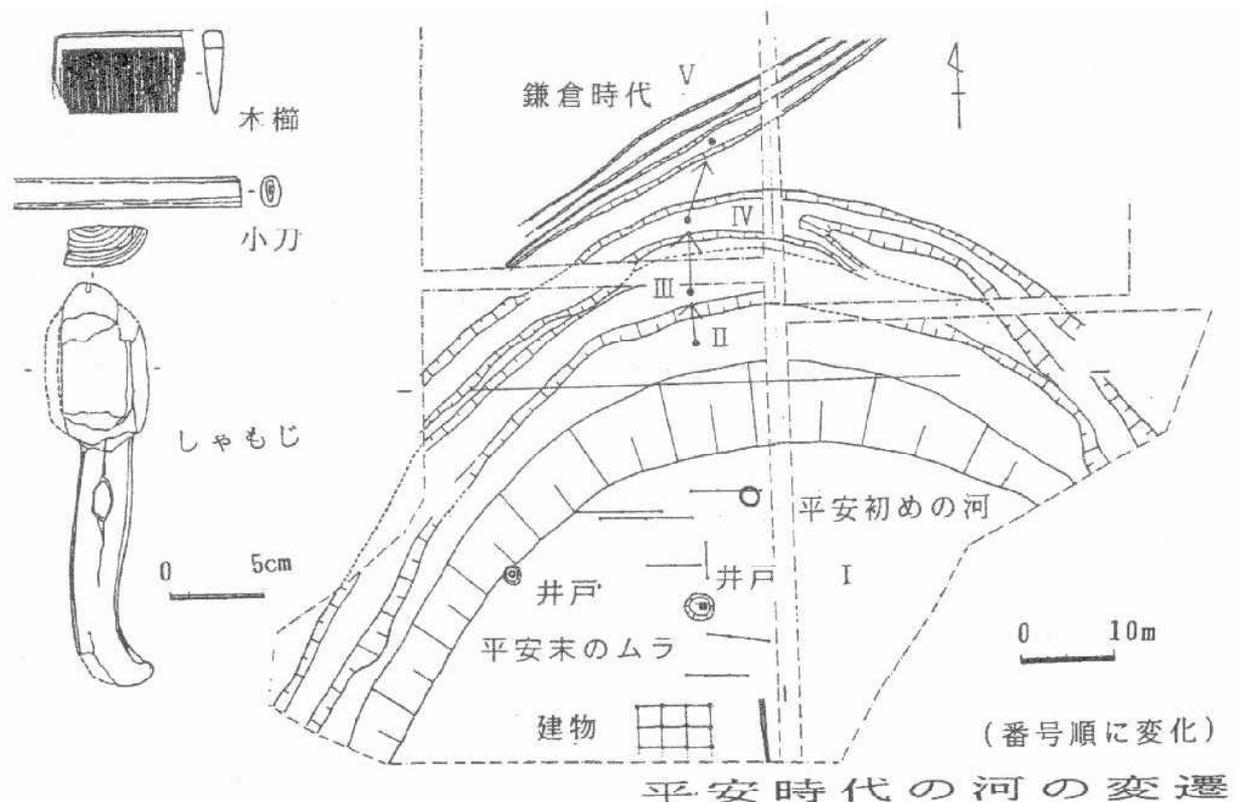
5. 平安時代中葉(10世紀前後)以降の河道(1100～800年前)

先の護岸杭列などを含めた人々の活動の結果か、あるいは自然環境の変化か、前代の河道は急速に埋まり、平安時代の中頃には、川幅は最大時22m程度にまでなります。川筋も、大きくは北東から南西とみられますが蛇行し、発掘区の内では、南東から大きく弧を描いて南西に抜け、中心は北に片寄ってきます。必然的に、水流も緩くなってきたとみえて、堆積土は、粒子が細かく、植物遺体等の有機分も多くなってきます。発掘区の南西部では、やはり護岸の杭列が施され、付近では、木樋、小刀の柄、木のしゃもじが、出土しました。これらは、偶然流れ着いた可能性もありますが、当時の井戸の祀りや墓の副葬品と共通する組み合わせですので、正にこの場所で祀りが行われた可能性もあります。

以後、平安時代末(12世紀頃)にかけて、河はさらに埋まり、中心を北に振ってますます蛇行を強め、最大時幅数m、深さ数十cmにまでなってしまいます。河岸には、牛や人の足跡が夥しく残っていました。鎌倉時代に入ると、再び北東から南西に直線に流れますが、それはもう幅3m程度のものです。

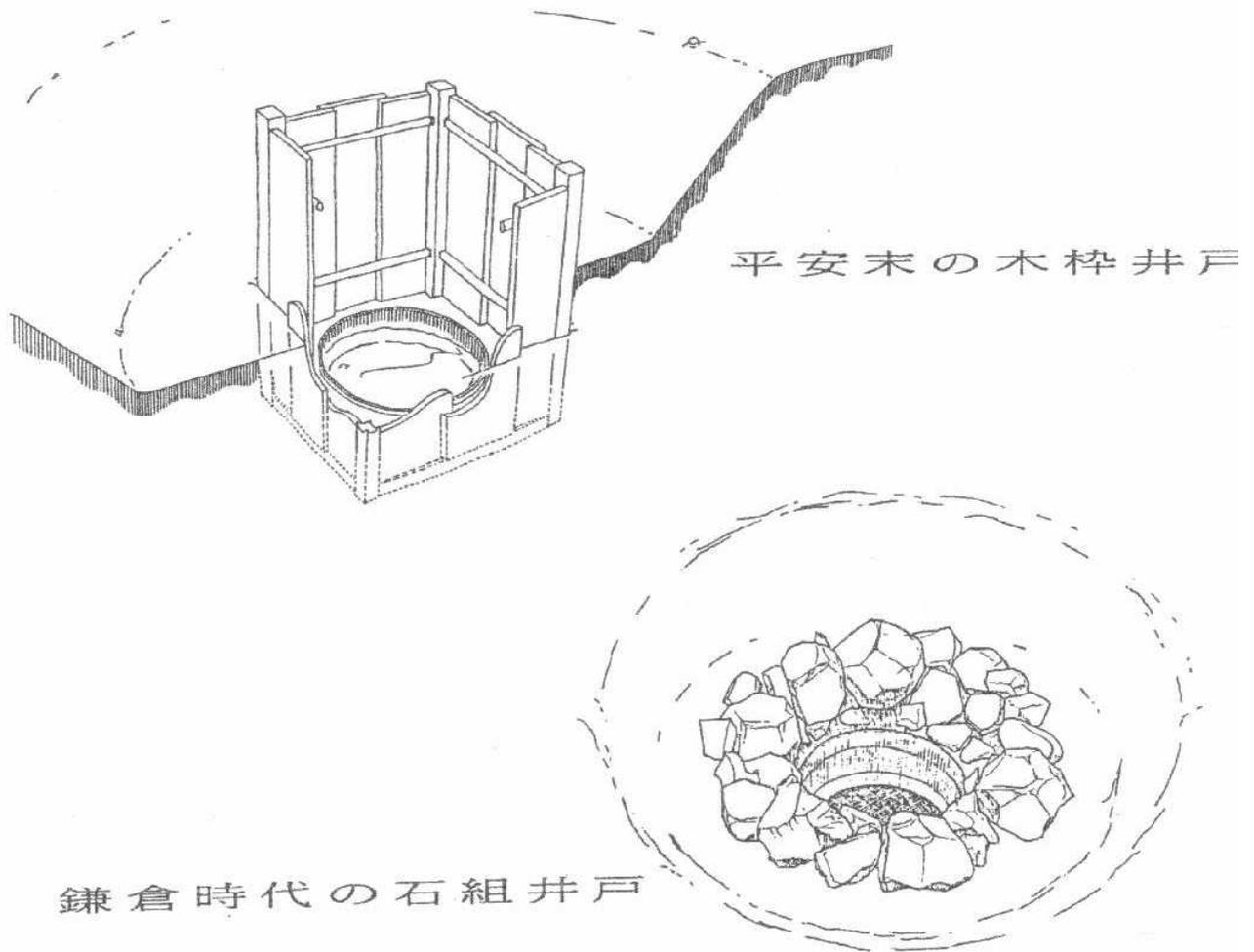
6. 平安末・鎌倉時代のムラ跡(900～750年前)

河がだいぶ埋まり、北に引いたのを受け、平安時代の初めには河の中心であった所にも、南からムラが広がってきます。地盤が砂で、なお川縁に当たるため、密度は粗ですが、掘立柱建物1棟、井戸2基、柵跡などが見付けられました。



第5図 平安時代の河の変遷

東側井戸は12世紀頃のもので、隅に杭を打ち板を立てて箱を組み、内庭の湧水部にワッパを据えています。西側井戸は、13世紀頃のもので、石組の下にやはりワッパを据えています。これらは、当時の井戸としては立派な部類です。



第6図 平安時代・鎌倉時代の井戸

7. 河跡から出土の遺物

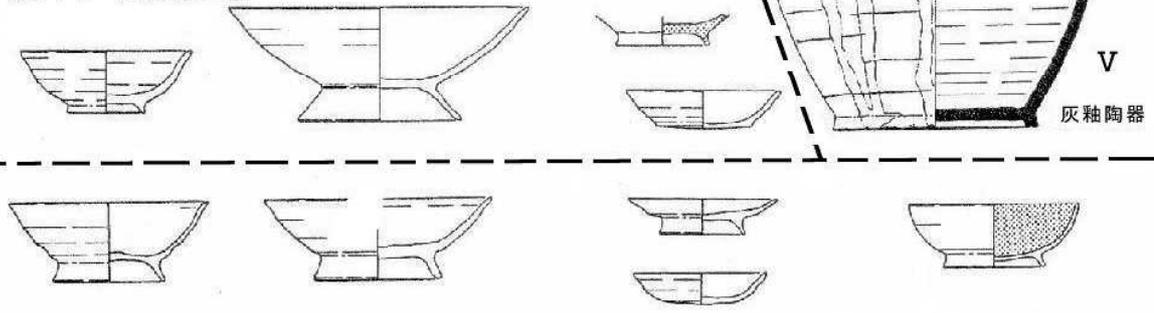
ほぼ平安時代を通じて埋まっていった河跡からは、膨大量の遺物が出土します。前代の弥生・古墳時代のものを除いた、奈良・平安時代の遺物は、須恵器(堅焼き)、土師器・土師質土器(素焼き)といった焼き物が殆どで、内では杯や碗などの食器類を中心に、煮炊き用の甕・カマド、貯蔵用の壺など多岐に及びます。変遷を辿る各段階の河の堆積土中には、必然的にそれより古いものを巻き込んでいますが、今後さらに検討を踏まえれば、その内容や組み合わせの変化の方向をつかめる資料となるかもしれません。また、硯・墨書土器といった字を書く人や施設の存在を示すもの、緑釉や美濃国産の灰釉陶器といった高級な焼き物が含まれ、先の祭祀用具とあわせ、発掘区外に延びる遺跡の性格を彷彿とさせます。

平安時代各段階の河跡堆積土出土の遺物

ローマ数字は「平安時代河の変遷」の段階に対応

断面：白抜きは土師器、黒は須恵器、トーンは緑釉陶器
器面：トーンは内黒土器

IV
蛇行する河がほとんど埋まった段階

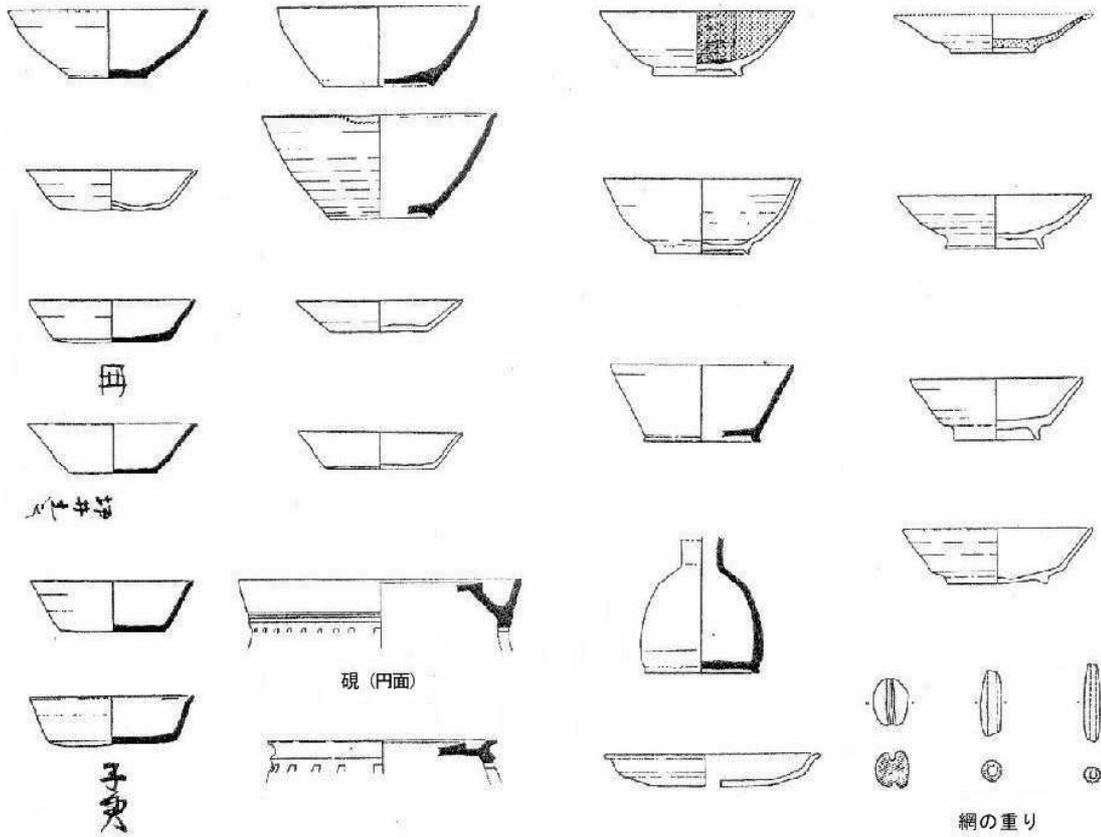


III



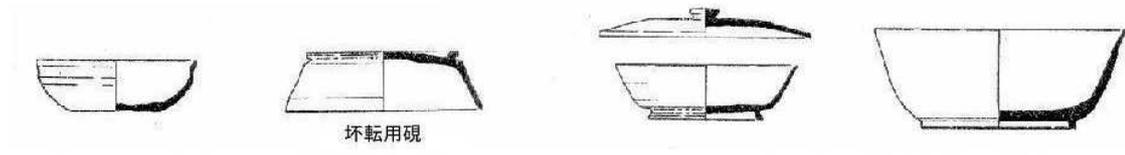
II

大きく蛇行し埋まり出す段階（平安中頃～後半）



I

北東から南西に大きく流れる段階



0

弥生時代の混入遺物

